

The Great Gatsby における聖母マリア崇敬

福 屋 利 信

はじめに

John M. Allen は、'The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald' なる副題を付した *Candles and Carnival Lights* において、*The Great Gatsby* (1925) の主人公 Gatsby のモラリストとしての一面がキリスト教精神、特にカトリシズムに根差している点を指摘し、彼の恋人 Daisy Fay への接し方を、「宗教的情熱で彼女を崇敬し、その姿を追い求めた」(with a religious fervor he worships and pursues her)⁽¹⁾ としている。また、Ernest Lockridge は、Fitzgerald が、「デイジー・フェイをギャツビーにとっての聖母マリアとして仄めかしても無節制だとのそしりを受けることはないだろう」(it is perhaps not an extravagance to suggest that Daisy Fay becomes Gatsby's version of the Virgin Mary)⁽²⁾ としている。本稿では、これらの先行研究の示唆を手掛りに、Gatsby の過剰とも思える Daisy の神格化の源泉を、カトリックのマリア信仰に求める。さらに本稿は、Gatsby による Daisy の神格化こそが、彼の夢の崩壊を招いた主要因だと主張する。

マリア崇敬の特質は、マリアの聖書における存在感の薄さゆえに、民衆がマリアに対する崇敬を自分達の想像力によって自由に形成できたという点にある。つまり、マリア信仰は、もともと民間から自然発生した異教的な要素が強い。プロテスタントはマリア信仰に含まれるこの異教性を拒否したが、カトリック教会は、民間の素朴な宗教的感情のすべてを排斥することは、キリスト教の信仰をあまりに狭く知的レベルで捉えてしまうと考えて、マリア信仰に対しては寛容であった。Gatsby がその想像力によって Daisy を自分だけのマリアに見

立てたとする解釈が可能性を持ち得るのも、こうした信仰の柔軟性を前提とする。

しかしその神格化は、作品の中では決して明示されてはおらず、暗示的な文によって仄めかされているのみである。それゆえに、本稿では、その暗示の解説作業が中心となる。なお、本稿においては、神に対してのみ行われる崇拝 (adoration) を聖母マリアに対して行なう行為、すなわち、キリスト教の教義では禁制とされたマリア崇拝 (Mariolatry) との混同を避けるために、Gatsby による Daisy の神格化に対しては、民間の素朴なマリア信仰をも包括したマリア崇敬 (the worship to the Virgin Mary) という言葉を使用する。

James Gatz による Gatsby の自己創造

Fitzgerald の短編 'Absolution' (1924, 1926) は、そのタイトルからしてカトリック的色彩を帯びた作品と知れるが、もともとは *The Great Gatsby* の序文として書かれ、Gatsby の少年時代を伝える部分であった。ところが作者はこの序文を切り離すことを決断した。Fitzgerald 自身、スクリブナーズ社の編集者 Maxwell Perkins に宛てた手紙の中で、"I'm glad you like *Absolution*. As you know it was to have been the prologue of the novel but it interfered with the neatness of the plan."⁽³⁾ と書いている。ここでの「適切さ」(neatness) とは、裏社会で暗躍する Gatsby を謎めいた神秘的なキャラクターに仕立てる「計画」

(the plan) に対する適切さに他ならない。序文は、Gatsby の少年時代を語り過ぎることによって適切さを損なっていたゆえに切り離されたのである。そして、その後独立した短編として出版された作品は、Gatsby のプロトタイプである十一歳の Rudolph Miller のついた嘘とそれに対する宗教的罪の意識がモチーフとなっている。Rudolph は、教会の神父に「罪の許し」(Absolution) を乞いながらも、厳格なカトリック教徒である父への反発ゆえに、「自分は両親の子ではない」という空想を抱く少年として描かれている。

こうした Rudolph の里子空想は、貧しい農家に生まれた出自を拒否し、十七歳になったとき、「自らのプラトンの観念」(his Platonic conception of

himself, 95)⁽⁴⁾によって自らがかくありたいと望む人物像を自己創造しようとした、*The Great Gatsby*における James Gatz (Gatsby の本名) にそのまま受け継がれている⁽⁵⁾。その自己創造は、「法律上の名前」(94) Gatz を「神の子」(God's boy)⁽⁶⁾を彷彿とさせる Gatsby に変えて行なわれ、その「神の子」が奉仕した対象は、「途方もなく大きくて実体の掴み難い世俗のけばけばしい美」(a vast, vulgar, and meretricious beauty, 95)、つまり富であった。従って、Gatsby が「父なる神の仕事」(His Father's business, *ibid.*) にいそしむと言うときは、神の美名のもとに脇目もふらず富を追求していくことへの誓いを意味した。言い換えれば、それは、彼が新しい神として崇めた「富の神」(Mammon) と交わした個人的な「契約」⁽⁷⁾であった。そしてこの契約によって、Gatsby の萌芽であった Rudolph の願い、つまりカトリシズムの呪縛から解放されて夢の世界の住人になるという願いはついに成就したかたちとなっている。

しかし、予定されていた序文では、カトリックの家に生まれ、幼い頃から宗教的訓練を受けてきたはずの Gatsby から、カトリック的モラルが跡形もなく払拭されたとは考え難い。Malcolm Cowley も、“Even though Fitzgerald excluded his Catholic boy hood from *The Great Gatsby*, it retains its connection with the novel.”⁽⁸⁾と述べている。実際、Gatsby が一人称の語り手 Nick Carraway に自分の生い立ちを告白するに及んで、嘘をついたら神の応報に従うと誓いを立てる場面 (64-64) には、幼き Rudolph 少年が抱いた罪の意識を、三十歳を過ぎた今も引き摺っている Gatsby の姿が見て取れる。そして、こうしたプロットに潜在しているカトリシズムは、他の何より、恋人 Daisy に対する Gatsby の感情に焦点を当てるとき浮かび上がってくる。

Gatsby による Daisy の創造

Nick の語りによると、「女は早くから知った」(95) とされる Gatsby であるが、⁹ “the first ‘nice’ girl he had ever known” (141) と表現されている女性、つまり自らの観念が女と認めた最初の女性 Daisy にだけは特別な感情で接する。次の二人の散策場面には、Gatsby の Daisy に対する思いがロマンティックな

筆致で描かれている。

...One autumn night, five years before, they[Gatsby and Daisy] had been walking down the street when the leaves were falling, and they came to a place where there were no trees and the sidewalk was white with moonlight. They stopped here and turned toward each other.... Out of the corner of his eye Gatsby saw that the blocks of the sidewalks really formed a ladder and mounted to a secret place above the trees – he could climb to it, if he climbed alone, and once there he could suck on the pap of life, gulp down the incomparable milk of wonder.

His heart beat faster as Daisy's white face came up to his own. He knew that when he kissed this girl, and forever wed his unutterable visions to her perishable breath, his mind would never romp again like the mind of God.... At his lip's touch she blossomed for him like a flower and the incarnation was complete. (106-07)

Daisy との散策を楽しむ一方で、Gatsby の意識は一緒にいる現実の恋人のもとを離れて、自己の想像世界の中で浮遊する。「数ブロック続く歩道が、梯子を形作って昇っているかのような、街路樹の上の秘密の場所」に Gatsby の意識は駆け昇り、そこで彼の想像力が創造した Daisy と向かい合う。ここでの梯子は、Genesis 28. 12における、神の御使いたちが昇り降りする天と地を結ぶ「梯子」(Jacob's Ladder) を強く連想させる。そして、Nathaniel Hawthorne が「想像世界に遊ぶに相応しい舞台を演出するもの」⁽⁹⁾と定義した「月明かり」の下で、Gatsby は、「ひとたび一人でその秘密の場所に到達すれば、生命の源である乳房を吸い、比類なき驚異のミルクをごくっと飲めるのに」と想像している。この母の乳房を本能的に求めるかのような記述は、キリスト教において多く見られる聖母マリアが幼子イエスに授乳する図例を思い起こさせる。ここからは、明らかに恋人を聖母に重ね合わせている「神の子」イエス・キリストの化身 Gatsby の深層心理が読み取れる。加えて、キリスト教では、「ひな菊」(Daisy) は聖母マリアの印⁽¹⁰⁾とされている。短い文の中にこのようにして鑲められた幾つ

かの宗教的暗示を考え合わせると、「接吻によって完全に彼女が彼の夢の化身 (incarnation) となった」とある引用最後の一文は、Gatsby の想像世界において、彼の聖母マリア崇敬が Daisy という一人の女性に対して具現化した瞬間の記述だとの解釈が可能になる。

Gatsby は、自ら「彼女の声には金が一杯詰まっている」(115) と表現している富の象徴 Daisy に、「富の神」に奉仕する自分との一体化を期待すると同時に、その想像力によって実際の彼女をはるかに越えた存在に神格化し、「神の子」が富への奉仕にいそしむことに対するカタルシスを得ようとしたのである。ここにおいて、「富」と「神」の双方に奉仕することはできないとされた宗教的タブー (cf. *Matthew* 6. 24; *Luke* 16. 13) に対して、さらには、キリスト教異端の中で脈々と流れ続けてきた「神の子」と「神の子の母」の秘められた結合というテーマに対して、偉大なる挑戦を仕掛けようとする Gatsby 流の形而上学が完成したと言える。

聖母マリア崇敬を暗示する Gatsby の象徴的行為

Gatsby は、特別の熱情を込めて神格化した Daisy を、自分の経済力のなさゆえに一度は失ってしまう。しかし、その後も Daisy への思いが消えることはなく、「神の子の母」である Daisy への擬似的なミサとも言える行為によって、再会を祈りつつ彼女への崇敬の念を増々強化してゆく。その個人的なミサは、夫 Tom Buchanan とともに住む Daisy の家の庭先に灯る「緑の灯」(25) を、Gatsby が毎夜日課のように眺める際に行なわれる。次の引用は、Nick によるその様子 of 描写である。

He[Gatsby] stretched out his arms toward the dark water in a curious way, and, far as I was from him, I could have sworn he was trembling. Involuntarily I glanced seaward – and distinguished nothing expect a single green light, minute and far away, that might have been the end of a dock. When I looked once more for Gatsby he had vanished, and I was alone again in the

unquiet darkness. (25)

Gatsbyが「両腕を暗い海に向かって好奇心をそそる仕草で伸した」先の「棧橋の先端」に灯る「緑の灯」は、作品の結末部で、「つかみ損なうことはないほど近いものに思えた彼の夢」(his dream must have seemed so close that he could hardly fail to grasp it, 171)に喩えられている。従って、この「緑の灯」は、Gatsbyの富獲得の夢(緑は、アメリカでは、その紙幣の色からドル紙幣を意味する)、ひいては彼の夢と一体化され、神格化されたDaisyの象徴ということになる。また、ここでの「両腕を前に差し伸べる」Gatsbyの動作は、キリスト教では「祈祷」を表すとされる(cf. Exodus 9. 29; Psalms 143. 6)。Joan M. Allenも、このGatsbyの動作は、「思慕と祝福の双方を表す司祭の身振り」(priestly gestures both of longing and benediction)⁽¹¹⁾を感じさせるとしている。さらに、「彼が震えていたのは誓ってもいいくらいだった」と表現されているGatsbyの姿からは、神聖なるものを前にした際の驚異が読み取れる。これらの暗示的な身振りからは、聖母マリアに見立てたDaisyに対する崇敬の念を絶えず喚起しようとする、Gatsbyの礼拝者としての姿を垣間見ることが可能である。

また、ここでの緑という色は、異教的樹木崇拜、母なる大地の豊穡、生命再生の色であり、キリスト教では青、赤、白とともに聖母マリアを象徴する色とされている。⁽¹²⁾しかし、西方教会のアイコンでは緑がマリアの衣服の色として使用されることはごく稀であった。これは、地母神的なマリア信心を守った東方正教会(Orthodox)⁽¹³⁾が、マリアのアイコンには生命再生を象徴する豊穡の木であるオリーブの緑を使用し続けたのに対し、父性原理を守りたい西方教会では、母性原理を象徴する緑は避けられたという教会の事情によるであろう。それでも、少ないながらも、Fitzgeraldの母方McQuillan家(アイリッシュ・カトリックの家系)の客間に掛かっていた「サン・シスト聖母像(複製画)⁽¹⁴⁾」の作者Raffaelloのように、聖母と緑を結びつけて描く傾向の強い画家達も存在した。⁽¹⁵⁾従って、宗教的カラー・シンボリズムの観点からも、あるいは、作家が育った家庭環境からも、Gatsbyが祈るように仰ぎ見た「緑の灯」は、聖母マ

リア崇敬につらなると言える。

Gatsby の聖母マリア崇敬の崩壊

Daisy との再会を夢見て彼女を「緑の灯」に見立てて、毎夜のごとくその「灯」を遠くから崇めていた Gatsby が、より具体的に彼女との生活を意識し始めるのは、彼が彼女に五年ぶりの再会を果たしたときからである。この瞬間から Gatsby は、カトリック教会が定めた七秘蹟の一つである婚姻 (matrimony) の段階に性急に進もうとする。実際に Gatsby の願いは、Daisy が夫 Tom から自由になった後二人で Daisy の故郷ルイヴィルに帰って、「彼女の家から嫁にもらうことであった」(106) と述べられている。しかし、時代の先頭を切って享楽主義的生活を楽しもうとしたフラッパー的側面を持つ Daisy に、平凡な家庭生活を期待することは不可能なことであった。Daisy は、「彼女の世界から完全に失われてしまったロマンティックな可能性」(romantic possibilities totally absent from her world, 105) を有していた Gatsby に魅力を感じていたのであり、そのロマンティックな想像力を失って家庭に納まろうとする Gatsby には失望していくばかりであった。すなわち、Gatsby の Daisy 再獲得の夢は、彼が彼女との家庭生活を強く求め始めたときから、すでに崩壊の道を歩み始めていたのであった。「とてつもなく大きな意味 (the colossal significance) を持つ」(90) とされた「緑の灯」が、再会直後に「棧橋の上にかかった単なる灯に過ぎないものとなってしまった」(Now it was again a green light on a dock, 90) と称されていることは、Gatsby の夢が現実味を帯びることがかえって陳腐化し、輝きを失ったことをいち早く察知した、語り手 Nick の冷静な判断を反映している。

さらに Nick は、作品の最終章で、Gatsby の夢とアメリカ初期の入植者達の夢とを対比させて、Gatsby の夢が崩壊する宿命にあったことを歴史的視点からも暗示している。その昔、オランダの水夫達によって発見され、「緑の胸」(green breast, 171) という比喩表現がなされているロング・アイランドの大地 (作品の舞台) と、約三百年の時を隔てて Gatsby が同じ場所で見つめた「緑の

灯」との対比部分 (*ibid.*) がそれにあたる。オランダの水夫達、つまり初期の入植者達が崇敬の念をもって眺めた「緑の胸」は、再生の力を秘めた地母神的マリアを想起させる。Louse H. Westling は、この「緑の胸」を女体化して捉え、マリアとの関連を指摘している。⁽¹⁶⁾ 一方、Gatsby が Daisy に重ね合わせて見た「緑の灯」は人工の灯であり、朝が来れば消えてしまう夢でしかあり得なかった。緑豊かなフロンティアを基盤としたアメリカン・ドリーム⁽¹⁷⁾の名残りを、1890年の国勢調査によってフロンティアの消滅が宣言された後も、大都市の暗黒社会で蘇生させようとした Gatsby の夢は、その無謀さゆえに、夜にだけ光を放つ人工の灯で象徴せざるを得なかった。

Gatsby の夢の崩壊は、作品の最終部において、Nick の語りによって印象的に綴られている。

Gatsby believed in the green light, the orgastic futures that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter – tomorrow we will run faster, stretch out our arms further... (171-72)

ここで述べられているように、Gatsby は Daisy を象徴する「緑の灯」を最後まで「信じていた。」それゆえに、Gatsby は、緑が象徴する地母神的マリアの子孫を残していく再生の力、つまり「性的な未来」(orgastic future) が Daisy との結婚生活によって開けると考えたのである。Daisy との関係においてはカトリックのモラルに縛られていた Gatsby にとっては、子供を授かる行為としての性が許されている宗教的枠内、つまり、婚姻という秘蹟 (cf. *Matthew* 19. 3-12; *I Corinthians* 7. 1-40; *I Timothy* 2. 15) に身を託すしか、Daisy との肉関係関係を正当化する手段がなかったと言えよう。しかし Gatsby は、その再生の力が、セクシュアリティを秩序化することにかけてはカトリックの教えよりはるかに効率の良かったプロテスタンティズムが支配的であったヴィクトリア朝期を通して、「年々自分達の前から後退りして、するりと逃げてしまっていた」ことに気づいていなかった。Frederick Lewis Allen は、ヴィクトリア時代のアメリカでは、「若い娘は僅かばかりの生理学教育を除いて無知のまま結婚し、夫に忠実に振舞い、幸福な生活へと導かれるべきだ」という社会通念がまかり

通っていたとしている。自らのセクシュアリティを行使せず、男性の性的主体を攪乱しない女性が望まれていたのである。このような精神風土とともに、元来の再生の力を秘めた異教的で地母神的なマリアはその力を削ぎ落とされてしまい、「ヴィクトリア朝の家庭という施設における貞淑な妻の象徴としての聖母マリア」⁽¹⁹⁾に置き換えられていった。Gatsby は、緑で象徴されるセクシュアリティを有していた地母神的マリアが、白で象徴されるセクシュアリティを厳しく秩序化されたヴィクトリア朝時代のマリアに変化していたことに気づいていなかったと言えよう。

この変化に気づいていたのは語り手の Nick であった。自己の理想を必死に追い求めるあまり、自身の視野に入ってくるものが何も見えなくなってしまった夢想家の Gatsby とは対照的に、Nick は自分の周囲の状況にある程度の関心を示す現実家であったゆえに、時代の変化を感知することが可能であった。彼は Gatsby の「緑の灯」に対する終始一貫した崇敬の念を語りつつ、一方で、少女時代から現在までの Daisy を、衣服だけに限らず、車、部屋に至るまでの身の回りのすべてを、マリアの処女性を表すとされる白で固めた女性として客観的に語っている。しかし Nick は、Daisy の身に纏う白が実は「偽りの白」であり、彼女が、自身の享楽主義的生活を保つために、資産家の夫 Tom が望むヴィクトリア朝的家庭生活を装っている女性であることをも見破っていた。Daisy の本質は、当時の若者の間で“Freudian gospel”⁽²⁰⁾と呼ばれ崇められた Sigmund Freud の性科学を抛り所に、セックスに対して再生の力より快楽追求を望んだフラッパーとしての彼女の部分にあった。Gatsby 邸での深夜パーティーにおいて、自分に興味を持つ不特定多数の男性に「緑のカードを配っている」(101) ことを Nick に告白し、それと同時に彼をも誘おうとする Daisy の言動には、性に対して、神が祝福している子供を授かることよりも快楽を求めた、これまた「偽りの緑」とも呼べそうなセクシュアリティを確認できる。現実の Daisy は、「緑」が象徴する地母神的マリアも「白」が象徴する貞淑なヴィクトリア朝のマリアも具現できない、時代の最先端を走るエピキュリアンであった。Gatsby の Daisy に対する幻想は、「実際の彼女を越えている。どんなものをも越えているのだ」(92) とする Nick の発言がそのことを暗示している。

Gatsby による Daisy の神格化が崩壊したのは、ひとえに、Daisy に代表されるフラッパーたちのセクシュアリティと生活信条を、Gatsby が Nick ほどには正しく理解していなかったゆえであった。Gatsby は、現実の恋人 Daisy が背負えるはずのない地母神的マリア像を彼女に求めたのであり、その神格化こそが、彼の夢の崩壊を運命づけてしまった主要因であった。「富の神」と交わした契約を忠実に履行し、物質的には大成功を収めていた Gatsby は、精神的救いを求める対象を過ったゆえに、掴み損ねることなどあろうはずもない状況にまで達していた自身の夢を、最後の最後で掴み損ねたのである。Gatsby の神が富であったなら、Daisy の神はその富の「消費」であった。

しかし、「神の子」の化身が見た夢の悲劇と崩壊は、作品の冒頭より一貫して Gatsby の行動を三人称単数の“he”を用いて精神的距離を保ちつつ語ってきた Nick が、作品の最後に至って、一人称複数の“we”に切り替えてその精神的距離を縮めて語っているという一点において「救済」されている。Gatsby の周辺に起こった1922年のひと夏の出来事を語り終えた Nick は、古い地母神的マリア像を新しい時代のトップ・ランナーの一人である Daisy に求めてしまった Gatsby の過ちを、ばかばかしくて未熟な行為と認識しつつも、自身の観念を何の躊躇いもなく実行に結びつけていく Gatsby の行動力に、最終的には共感を示すに至っている。そして、その共感の強さが一人称複数の“we”に込められて、前掲した引用末尾の、「われわれは、明日になればもっと速く走ろう、さらに遠くへ両腕を差し伸そう」という、自らの夢に殉死した Gatsby への鎮魂歌とも言える美しい表現につながっている。注目すべきは、主人公と語り手の心情が一体化しているという点で重要な意味を持つ最後の一文でも、再び「両腕を差し伸す」という司祭的身振りが使用されている点である。この繰り返しには、作品に付与した宗教的テーマを最後まで喚起しようとする作者の強い意図が感じられる。

おわりに

The Great Gatsby は、宗教的タブーとされる「富の神」への奉仕を誓い、一

心不乱にその奉仕にいそしんだ Gatsby の神に対する冒瀆とも思える行動を明示している。このような宗教的背信行為 (apostasy) が可能であったのは、他の何より想像力を優先する Fitzgerald という作家の資質ゆえであったろう。

Edwin Fussell は、⁽²¹⁾ “Fitzgerald’s Catholic apostasy was half genuine and half imagined.” としている。しかしその一方で、⁽²²⁾ 「神の子」である自分が聖母マリアと結びつくことで、自らの靈魂をより高い次元に飛翔させようとした、Gatsby の素朴な信仰心も暗示している。この二重構造は、Fitzgerald が自伝的エッセイ「崩壊」(‘The Crack-Up’) において、「最上の知性の基準とは、対立する二つの観念を同時に抱きながら、しかも両者を機能させることのできる知性である」⁽²²⁾ とした信念の反映であったとも言えよう。

加えて、ロマンティックで幻想的な神話を作り出すことにかけては秀でた想像力を保持し続けてきたアイリッシュの血が作者 Fitzgerald の中にも脈々と流れていることも忘れてはならない。このアイリッシュに特徴的な想像力は、アイルランド・カラーでもある緑にこだわり、「緑の灯」を眺めながら自分の想像世界において Daisy を神格化していく Gatsby の姿に色濃く投影されている。ピューリタニズムと啓蒙思想を精神的基盤とするアメリカの開拓者の夢に Gatsby の夢を重ねようとしたプロット作りの過程で、完全に切り離されたかに見えるカトリック的色彩は、実は Gatsby の聖母マリア崇敬という形でプロットの底辺を支えているのである。

註

- (1) Joan M. Allen, *Candle and Carnival Lights: The Catholic Sensibility of F. Scott Fitzgerald* (New York: New York University Press, 1978) 102.
- (2) Ernest Lockridge, ed., *Twentieth Century Interpretations of “The Great Gatsby” – A Collection of Critical Essays*, Introduction by Ernest Lockridge (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1968) 14.
- (3) John Kuehl and Jackson, R. Bryer, eds., *Dear Scott/Dear Max: The Fitzgerald-Perkins Correspondence* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1971) 72.
- (4) 以下括弧内の数字は、F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, Introduction and Notes by Tony Tanner (Harmondsworth: Penguin, 1990) の頁数を示す。

- (5) Joan M. Allen は、「少年時代、Fitzgerald は、近所の人たちや友人たちに、自分は捨て子であり、スチュアート王家の子孫とふれ回った。そして、両親に対する批判的な態度と拒否は、Fitzgerald 本人にとってだけではなく、彼の創作したほとんどのヒーローたちにとっても、本質的な経験となった」としている。Joan M. Allen, *op. cit.*, 65.
- (6) Henry D. Piper, *Fitzgerald's "The Great Gatsby": The Novel, the Critics, the Background* (New York: Charles Scribner's Sons, 1970) 214.
- (7) Fitzgerald は、「神と人間との間の契約」(testament) に対して、“contract” とい主として経済的取引きで使用される言葉を充てている (“their contact with the gods,” Fitzgerald, ‘The Crack-Up,’ in *The Crack-Up with other Pieces and Stories* (Harmondsworth: Penguin, 1965, 55)。この言葉使いは、Fitzgerald という作家が厳格なキリスト者でなかったことを露呈しており、キリスト教の教えに対する冒瀆とも思える思想を、時として作品に反映させてしまう潜在性をも示している。
- (8) Joan M. Allen, *op. cit.*, 94.
- (9) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter* (New York: Random House, 1950) 42.
- (10) 中森義宗『キリスト教シンボル図典』(東信堂, 1993) 82。
- (11) Joan M. Allen, *op. cit.*, 102.
- (12) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1974) 226-28.
- (13) キリスト教は、小アジアへの宣教の過程で、当地の人々の心を捉えていた地母神信仰をマリア崇敬に変容させ、そうすることで母性原理を裏から受け入れようとした。それゆえに、東方教会(ビザンチン)は、マリアへの帰依がキリスト教の歴史を通じて集中した土地となった。Cf. Jaroslav Pelikan, *Mary Through the Centuries: Her Place in the History of Culture* (New Heaven: Yale University Press, 1966) 104.
- (14) Andrew Turnbull, *Scott Fitzgerald* (New York: Charles Scribner's Sons, 1962) 5.
- (15) イタリアのフィレンツェ(Firenze)の画家達は、聖母の衣裳を緑で描く傾向が強い。Raffaello も一時期このフィレンツェに滞在し、かの地で画法を学んでいる。Cf. ブルノ・サンティ, 石原宏訳『イタリア・ルネサンスの巨匠たち, 20, ラファエロ』(東京書籍, 1995) 8-15. [Bruno Santi, *Great Masters of Art: Raffaello*]
- (16) Louise H. Westling, *The Green Breast Of the New World – Landscape, Gender, and American Fiction* (The University of Georgia Press, 1996) 3-5.
- (17) アメリカン・ドリームの原型は、努力したものが公平に酬われるという小市民的な夢であった。それを可能にしていたのがフロンティアの存在であった。Marius Bewley も、アメリカン・ドリームを、“a product of the frontier and the West rather than of the Puritan Tradition” と説明している。Lockridge, *op. cit.*, 38.
- (18) Frederick Lewis Allen, *Only Yesterday: An Informal History of the 1920's* (New York: Harper & Row Publishers, 1964) 73.

- (19) カレン・アームストロング, 高尾利数訳『キリスト教とセックス戦争: 西洋における女性観念の構造』(柏書房, 1996) 21. [Karen Armstrong, *The Gospel According to Woman: Christianity's Creation of the Sex War in the West*]
- (20) Frederick Lewis Allen, *op. cit.*, 81
- (21) Edwin Fussell, 'Fitzgerald's Brave New World,' in *F. Scott Fitzgerald Critical Assessments* vol. VI, ed. Henry Claridge (Near Robertsbridge: Helm Information Ltd., 1991) 143.
- (22) Fitzgerald, *The Crack-Up with other Pieces and Stories*, 39.

* 本稿は, 1999年10月17日, 松山大学で開催された「第71回日本英文学会全国大会」において口頭発表した原稿を基にしたものである。

佛教大学英文学会会則

- 第一条 本学会は、佛教大学英文学会（以下本学会と略す）と称する。
- 第二条 本学会は、英米文学の相互の研究を通して学術発展に寄与し、あわせて会員相互の親睦をはかることを目的とする。
- 第三条 本学会の会員は、本学英語英米文学科専任教員、および会長が推薦した者とする。
- 第四条 本学会は、次の事業を行う。
1. 研究紀要（『英文学論集』）の発行。
 2. 公開講演会の開催。
 3. その他本学会の目的を遂行する上で必要と認められる事業。
- 第五条 本学会に次の委員をおく。
1. 会長 1名。本学英語英米文学科専任教員の互選により決定する。任期は2年とし、重任は妨げない。
 2. 委員 若干名。会長の委嘱により決定する。
 3. 会計監査 2名。会長の委嘱により決定する。
- 第六条 委員会は、会長および委員若干名により構成され、次の事を行う。
1. 予算、決算および事業計画。
 2. 研究紀要（『英文学論集』）。
 3. その他。
- 第七条 本学会の経費は会費（年額3千円）その他の収入をもってこれにあてる。会計監査は本学会の会計を監査する。
- 第八条 年度は4月1日から翌年3月31日とする。
- 付 則
1. この会則は平成14年4月1日より実施する。
 2. この会則の変更は、全会員の過半数の賛成を得て行われる。

研究紀要（『英文学論集』）内規

1. 本紀要に発表できる者は、本学会の会員とする。
2. 紀要発行は年一回とする。
3. 投稿原稿は未発表のものであること。ただし、既に口頭で発表し、その旨明記してあるものはこの限りではない。研究論文以外に翻訳、書評等を投稿できる。
4. 原稿は横書きで、和文の場合は400字詰原稿用紙30枚以内（注を含む）、英文の場合には、A4版タイプ用紙ダブルスペース（65ストローク×25行）で20枚以内（注を含む）とする。
5. 原稿締切は原則として10月10日とする。